

他者志向的な達成動機と自律的動機の関係(2)

○今井 真¹・#伊藤 忠弘²

(¹ 学習院大学人文科学研究科・² 学習院大学文学部)

目的

困難な目標の達成を試みる際、自身の目標達成や自己実現を通し他者からの支援的な働きかけや応援、期待に応えようとすることがある(今井, 2024)。先行研究において、他者の存在に基づく動機づけは自律性の低いものとして扱われることが多かった。これについて検討した今井(2025)に続き、ここでは異なるサンプルを対象に他者志向的な動機と自律的動機の関係について検討する。

方法

参加者 24歳以下の大学生 300名

質問紙 他者志向的動機 今井(2025)の項目を一部修正し使用した。「大切な人の期待に応えたかったから」等の15項目。

自律的動機 西村ら(2011)の自律的学習動機尺度を用いた。4因子各5項目の計20項目。

手続き ネット調査会社に委託し、参加の任意性を説明のうえ調査を実施した。「高校時代についてお聞きします。以下の項目は、あなたが勉強する理由としてどの程度あてはまりますか」と教示し、上述の計35項目を同一ページ内でランダムに提示した。また、DQSとしての項目、他者志向的動機に関する項目における「大切な人」として誰を思い浮かべたか尋ねる項目等を用いた。

結果

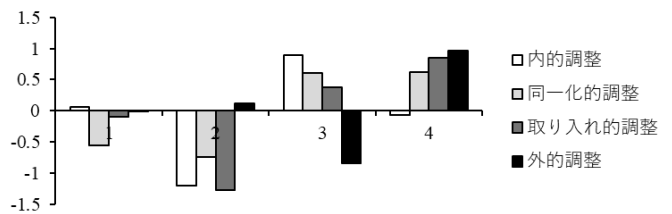
DQSに誤った回答をした者、「大切な人」として教科の名前を挙げた者、どちらの尺度項目についても同様の回答を繰り返した者を除いた278名を分析の対象とした。なお、全ての分析においてHADon18_010(清水, 2016)を用いた。

因子分析 両動機尺度に対して同時に最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況、平行分析の結果などから5因子解を採用した。第1因子は他者志向的動機に関する項目がまとまったことから「他者志向的動機」と命名した。第2因子から第5因子についてはいくつかの削除項目があったものの、先行研究と概ね同様の因子を構成したため、それぞれ「内的調整」「同一化的調整」「取り入的調整」「外的調整」と命名した。各因子の平均得点を算出し、これを

下位尺度得点とした。下位尺度間の相関を求めたところ、他者志向的動機は内的調整、同一化的調整との間で中程度の相関($r = .51, .52$)、取り入的調整との間で弱い相関($r = .39$)が確認された。

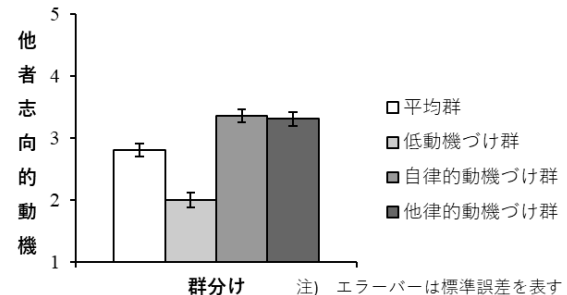
クラスター分析 自律的学習動機の各下位尺度得点を標準化し、Ward法によるクラスター分析を行ったところ、4つの群が見出された(Figure 1)。各群の特徴から第1群を「平均群(78名)」, 第2群を「低動機づけ群(59名)」, 第3群を「自律的動機づけ群(78名)」, 第4群を「他律的動機づけ群(63名)」とそれぞれ命名した。

Figure 1 各群の特徴



分散分析 クラスター分析に基づく群分けを独立変数、他者志向的動機を従属変数とする分散分析を実施したところ、群分けの主効果が認められた($p < .001$, Figure 2)。第3群と第4群の間を除き有意な差が認められた。第1群と第4群の間では1%水準、その他では0.1水準で差が有意であった。

Figure 2 各群の他者志向的動機



考察

本調査において、他者志向的動機と自律性の高い動機との間に有意な相関が認められた。一方、因子分析では異なる因子を構成し、分散分析では自律的な群と他律的な群において有意な差が認められなかったことを踏まえると、両動機は異なる次元で捉えられることが示唆される。

付記 本報告の内容は学習院大学人文科学研究科の共同プロジェクトの一部として実施された。